

第49回日本泌尿器科学会中部総会シンポジウム (Ⅳ)

「補助生殖技術の進歩と適応」

—司会者のことば—

金沢大学医学部泌尿器科学教室 (主任: 並木幹夫教授)

並 木 幹 夫

関西医科大学泌尿器科学教室 (主任: 松田公志教授)

松 田 公 志

男性不妊症は、泌尿器科学の一分野として長い歴史があり、優れた業績が蓄積されてきた。しかし、明確な治療効果が得られているのは、低ゴナドトロピン性性腺機能低下症、精索静脈瘤、閉塞性無精子症など、限られた疾患だけである。男性不妊症の多くを占める特発性精巣機能障害では、その発生機序が解明されていないことから、いまだ十分な治療法が開発されていない。

体外受精や顕微受精などの補助生殖技術 (ART) の著しい進歩は、男性不妊症の治療を大きく変革した。初期の体外受精では、試験管の培養液の中でも受精のためには相当の精子の量と質が必要であり、男性不妊症に対する治療成績は必ずしも満足できるものではなかった。しかし、卵細胞質内精子注入法 (ICSI) の開発により、今日では数個の生存精子さえ入手できれば受精の可能性がある、これまで絶対不妊とされた Klinefelter 症候群においてさえ妊娠児が報告されるようになった。ICSI によって男性不妊症のすべての問題が解決されたとの風潮さえ一部に見られる。

しかし、ICSI には、受精する1個の精子を人為的に選別することの可否、不妊症の原因である遺伝子異常の子孫への伝播の可能性、流産や出生児の奇形率など、まだ解決されていない多くの問題があるのも事実である。男性不妊症患者を診療する泌尿器科医は、ART の進歩の現状と問題点、適応を正しく理解することが求められる。

本シンポジウムでは、不妊症診療のエキスパートである婦人科医をゲストに迎え ART の進歩と成績を紹介していただくと共に、泌尿器科での取り組みを報告した。また、ART の問題点についても整理し、男性不妊症に対する ART の適応について検討をお願いした。

補助生殖技術の進歩 (小辻) では、ART 開発の歩みを概説し、現状と問題点、適応、さらに将来の課題について解説していただいた。まず自然妊娠の達成を目指すべきであることが強調されたのは印象深かった。

補助生殖技術の臨床成績 (宮崎) では、人工授精から精巣精子を用いた ICSI まで、さまざまな ART それぞれの受精率、妊娠率が、演者の経験から紹介された。ICSI において運動精子の利用が重要であることが指摘された。

精巣上体精子採取法 (奥野) では、顕微鏡下精巣上体精子吸引術と経皮的精巣上体精子吸引術について概説され、その治療成績も報告された。閉塞性無精子症患者の多くは精路再建術で治療可能であるが、先天性両側精管形成不全では精巣や精巣上体からの精子採取が唯一の治療法である。

精巣精子採取 (北村) では、バイオプティガンを用いた採取法を含めた手技の紹介と共に、閉塞性無精子症や精巣機能障害による無精子症に対する精巣精子採取の成績、妊娠率が報告された。精巣機能障害患者での精子採取の適応や精子保存法についても検討された。

遺伝子異常に対する対策 (佐々木) では、Y染色体長腕上の精子形成に関与する遺伝子や、先天性両側精管形成不全に関連する嚢胞性線維症の遺伝子など、男性不妊症と関連のある遺伝子異常について概説され、さらに、これらの患者に対する将来の治療法の基礎実験として、マウス精子、精巣に対する遺伝子導入の実験成果が報告された。現時点では生殖細胞に対する遺伝子治療は承認されていないが、ICSI による遺伝子異常の子孫への伝播が問題とされており、今後議論されるテーマと考えられる。

急速に進む少子化が社会全体として大きな問題になりつつある現在、児を熱望する不妊症夫婦の治療は、患者の幸せの追求と共に社会政策としても重要と思われる。その点でも不妊症の治療成績を大きく向上させた ART の功績は大きい。一方で、すべての夫婦が望むのは、夫婦の愛にはぐくまれた自然妊娠であることに疑いはない。これからの不妊症診療では、泌尿器科医と婦人科医が夫婦の妊孕力に関する情報を共有し、個々の夫婦が最も適した治療法を選択できるようにサポートしなければならない。本シンポジウム

で、産婦人科医と泌尿器科医が ART の現状と問題点を討論できたことが、今後の不妊症診療の適切な進歩に役立てれば幸いである。シンポジストの先生方、とりわけ産婦人科の小辻、宮崎両先生、最後まで熱心に討論いただいた会場の先生方、そして、このテーマを

シンポジウムに取り上げていただいた奥山明彦学会長に謝意を表する。

(Received on January 13, 2000)
(Accepted on January 25, 2000)